

歴史散歩

れきしさんぽ°No.17

大善寺玉垂宮由来の文化財

▼現在の大善寺玉垂宮

■大善寺玉垂宮の歴史■

大善寺町宮本に鎮座する大善寺玉垂宮は、白鳳元年(672)の建立と伝えられ、現在の祭神は玉垂命・八幡大神・住吉大神の三神です。早くから境内に高法寺、後に御船山大善寺と称した神宮寺が建立され、以後神仏習合し繁栄しました。

弘仁5年(814)には嵯峨天皇の勅命で三池郡司師直もろなおにより、殿堂・楼門・回廊などが造営され、盛時は45坊、社領3,000町であったと伝えられます。

中世には豊後の大友親匡の社領寄進などもあり、地域の宗教勢力として力をふるい、大いに栄えました。近世に入ると小早川秀包から社領を没収され一時衰微しますが、その後には田中吉政・有馬豊氏ら時の国主の社領寄進があり復興しました。

江戸時代は天台宗座主と大祝隈氏によって運営され、地域の宗教的な中心として崇敬を集めました。明治2年(1869)の神仏分離により、寺が廃止され玉垂宮のみが残り、現在まで人々の尊敬を集めています。



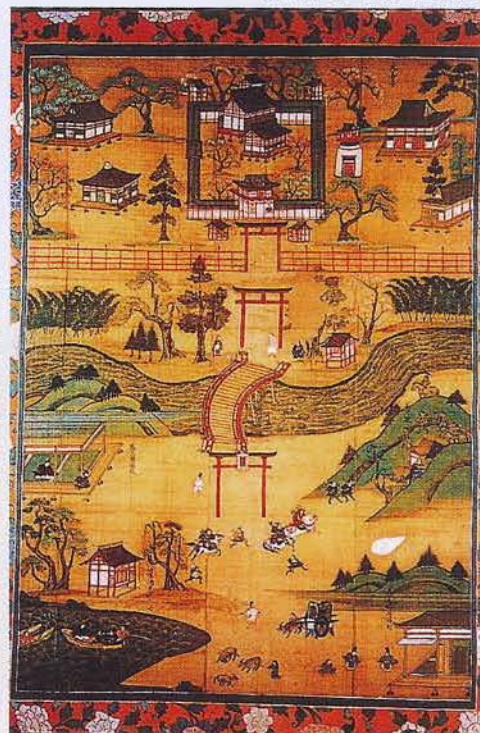
■絹本著色玉垂宮縁起■

▼絹本著色玉垂宮縁起

「絹本著色玉垂宮縁起」は、旧箱書銘によると、南北朝時代の建徳元年(1370)、懐良親王への奏聞をへて大檀那菊池武安・勸進阿闍梨道意らの発願により、地方絵師と思われる民部法橋忍智が、破損した古い縁起絵(絵巻物形式)を2幅の掛軸に書きかえたものです。

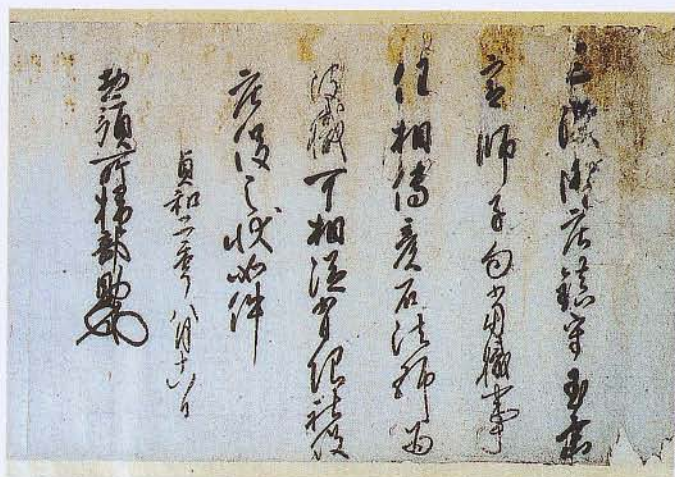
2幅のうち1幅には、神仏習合時代の玉垂宮の境内や周辺の高三瀧廟院や大川酒見社の景観が描かれています。また一方は、神功皇后の「征韓」の故事が中心となっており、上方には日向国武市城や香椎の座所、高良の宿所などが、下方には海戦や応仁天皇出産の様子が描かれています。これらの説話が、上から下に蛇行しつつ配置されており、その絵柄は大和絵の作風にもとづいたものです。

この縁起は国の重要文化財に指定され、現在は京都国立博物館に寄託されています。また慶安4年(1651)に、この縁起の複本が久留米藩2代目藩主有馬忠頼により寄進されましたが、久留米市草野町の市立草野歴史資料館にてその複製本を見ることが出来ます。



■玉垂宮師子勾当職安堵状■

大善寺町夜明に居住した梅津家は、鎌倉時代以降代々田楽をもつて筑後地域の神社に奉仕してきました。源頼朝から「美麗」の称を許されたと言い伝えられ、「美麗田楽」と称しています。戦国期から江戸時代に入って大友氏や田中氏・有馬氏などその時々^の領主の庇護を受け、その芸能を受け継いで来ました。伝来の文書は中世の芸能研究上、貴重な資料となっています。



▲玉垂宮師子勾当職安堵状

■大友義鑑所領預ヶ状■

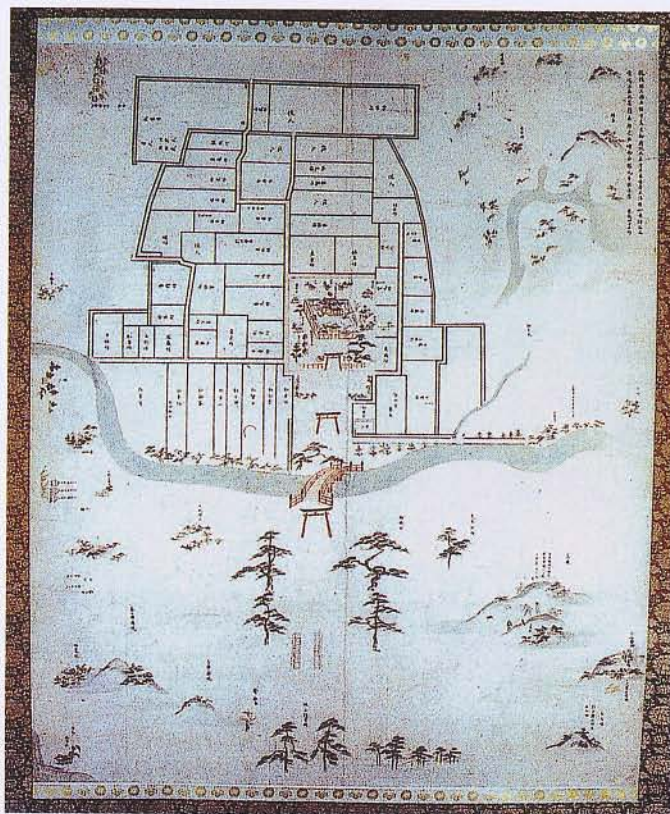
戦国期、天文5年(1536)の山口の大内氏との和議を機に、豊後の大友氏は筑後への支配を強めていきます。龍造寺氏もまた天正3年(1575)以降、筑後への進出を繰り返しました。この間筑後の諸豪族は両氏との離合を繰り返しました。大善寺の隈氏もこの例にもれず、そのような戦国期の事情をあらわす文書が伝えられています。この「預ヶ状」もそのうちの一つで、大友氏が大善寺隈氏に知行地を与えたことが書かれています。



▲大友義鑑所領預ヶ状

■大善寺玉垂宮境内絵図■

神仏習合時代の^{からからばし}大善寺玉垂宮の様子が描かれています。玉垂宮を中心に僧房などや^{からからばし}広川・傘橋・上野町など周囲の様子が配されています。傘橋は祭典に使われる神橋で、玉垂宮の門前町筋から神殿に向かって一直線上に架けられていました。江戸時代、この橋が洪水で流落し、架け替えられましたが、前の橋の石柱は境内に記念塔として残されています。



▲大善寺玉垂宮境内絵図

▼鬼面



■江戸時代の復興■

江戸時代初期は、玉垂宮の復興期にあたります。例えば、慶長6年(1601)筑後国主となった田中吉政は、大善寺宗徒宛に300石(田中高)を寄進したのをはじめ、拝殿・鐘楼を建立し、梵鐘・鰐口の寄進などを行いました。また、田中家の断絶、筑後北半の大名となった有馬家も同様の保護を与えています。

玉垂宮には、この復興期の様子を伝える慶長の年号のはいった宝物が残されています。

■鬼面■

裏面の墨書銘から慶長辰年(9年・1604)3月に寄進されたものと分かります。

また寄進者は後述の「鉾」と同じく弘重次郎左衛門尉であると考えられます。

木彫の技も確かなもので、江戸時代初期のものとして注目されます。

▼鉾



▼御幡



■鉾■

鉄製の鉾1対で、刻銘により慶長9年3月に犬塚村弘重次郎左衛門尉からの寄進であることが分かります。

■御幡■

絹製の幡(仏教で用いる荘厳用の旗)で、その頭・身・足には以下のような墨書があります。

「天正の争乱の際、この幡が肥前寺井津の孫九郎という者に奪い取られたが、慶長13年(1608)に孫九郎に神託があり、玉垂宮に返された」。

▼頭巾烏兜



■頭巾烏兜■

1対の紙で作られた大きさ50cmほどの兜です。今は退色してしまっているが、作製当時は鮮やかな色彩であったと想像できます。

箱書によると享保17年(1732)4月15日に、光山孫之丞ら12名により寄進されたものです。

■ 鬼 夜 ■

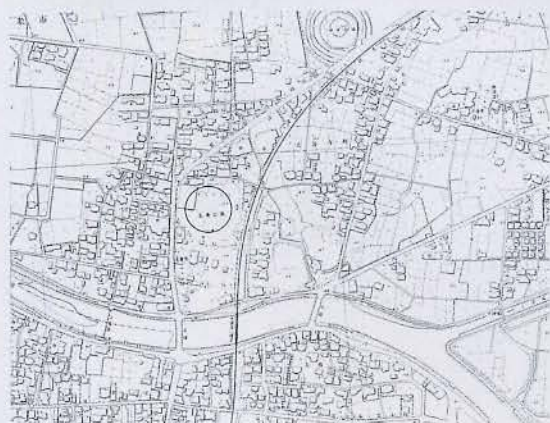
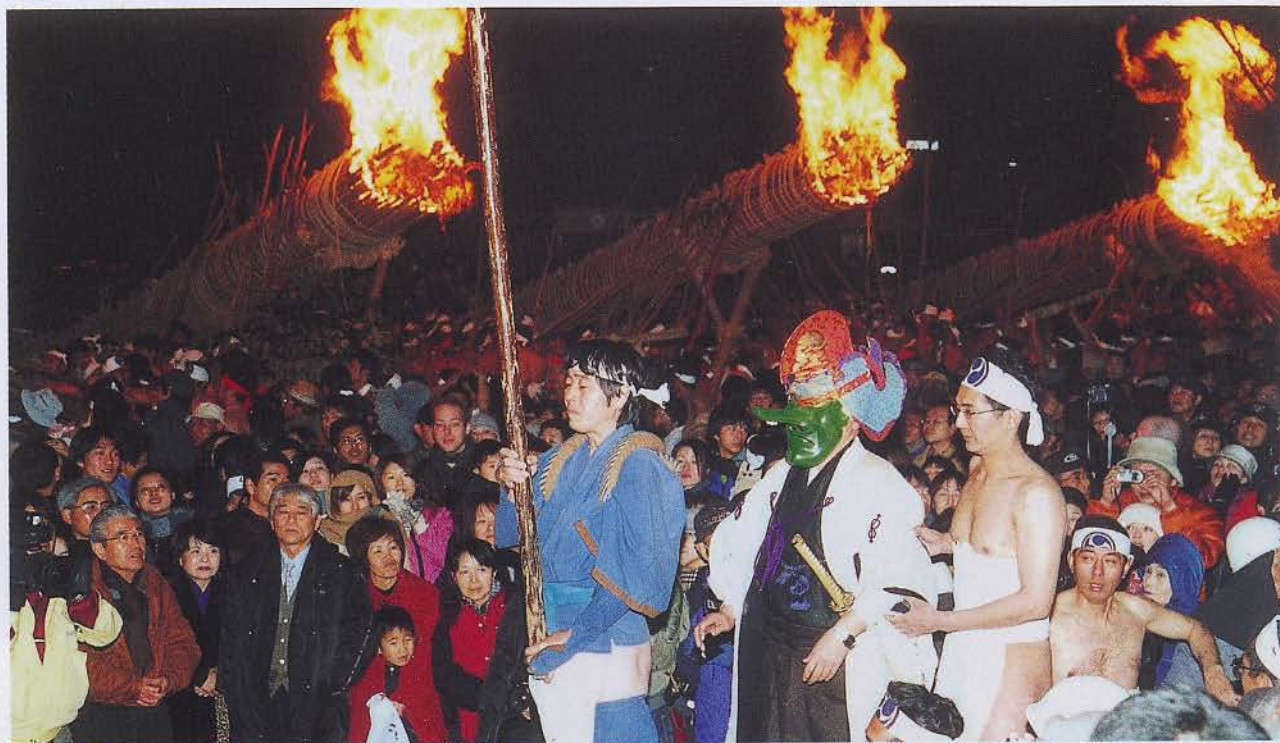
毎年正月7日におこなわれている追儺^{ついな}の行事で、日本三大火祭りの一つに数えられ、大勢の見物人を集めています。平成6年12月13日には国の重要無形民俗文化財に指定されています。

地元に残る「吉山旧記」によると、仁徳天皇56年(368)1月7日勅命を受けた藤大臣が、肥前国の桃桜沈輪^{ゆすらちんりん}という悪党を、秘策を用いて討ち取り、その首を焼却したことが始まりとあります。祭りは、昼の鬼面尊神^{きめんそん}の神事と種蒔き神事や夜の大松明廻し、鉾面^{ほこめん}神事及び鬼堂回りなどの神事からなります。

鉾面^{ほこめん}神事は、悪党退治の様子を再現するものです。これは世襲の家が努める行事で、介添役の若者が鬼の面を被った2人から、それが持つ鉾を奪い取り「ほことった」、被った面を奪い取る「めんとった」、この2名が腰にさした刀を抜く「そらぬいだ」の3つの場面から成ります。その後に行われる大松明廻しで、祭りはクライマックスを迎えます。氏子より奉納された直径約1m、全長約13mの6本の大松明が、大勢のしめこみ1本の氏子によって支えられ、火の粉を散らしながら勇壮に本殿の周りを7度廻ります。この間、鬼役は人目に付かないよう姿を隠しながら、鬼堂を7回半回ります。

やがて1番大松明は汐井場に向い、赫熊の子供にかくまわれた鬼は、「みそぎ」をおこない、神殿に帰りつくと厄鐘が打たれ、大松明は消え、祭りは興奮の余韻の中、静かに終わります。

▼鬼夜



◆ 歴史散歩 No17 ◆

平成15年3月31日

発行 久留米市教育委員会

〒830-8520 久留米市城南町15-3

教育文化部文化財保護課 0942-30-9225

久留米市埋蔵文化財センター 0942-34-4995

久留米文化財収蔵館 0942-38-6194